

利行満足章

(住岡夜晃先生 論註講義)

第一講 総標

一、利行満足

利行満足とは五念門の因行に対して、五功德の果相を示し、因果対説して以って二利成就することを顕す。既に□略以って因行満足せることを明された。故に今は果徳成就の相を明す。而して五果を明すは五因の分齊を示すにあり。

五因は第一章の「我一心」より開けたもので、要は一心の廣大無碍なることを明すにあり。此に於いて一心の華文と讃称せらるる祖言を敬信すべし。

利行満足とは二利の衆生を利行と云い、成就するを満足と云う。自利利他の行が彼土に至って成就す。故に「利行満足」と云う。

問ふ、利行は因行なるべし、何故に果徳と云うのであるか。

答、五功德に両重の分別がある。

利行満足章

第一講 総標

一、利行満足

利行満足とは

五念門の因行に対して、五功德の果相を示し、因果対説して、以って二利成就することを顕す。既に□略以って因行満足せることを明された。故に今は果徳成就の相を明す。而して五果を明すは五因の分齊を示すにあり。

五因は第一章の「我一心」より開けたもので、要は一心の廣大無碍なることを明すにあり。ここに於いて「一心の華文」と讃称せらるる祖言を敬信すべし。

利行満足とは

二利の衆生を「利行」と云い、成就するを「満足」と云う。

自利利他の行が彼土に至って成就す。故に「利行満足」と云う。

問ふ、利行は因行なるべし、何故に果徳と云うのであるか。  
答、五功德に両重の分別がある。

一に現当に約す。謂く、五念の因行に依って彼土に於いて得る所のものを今の門となす。則ち、此の五門は果である。

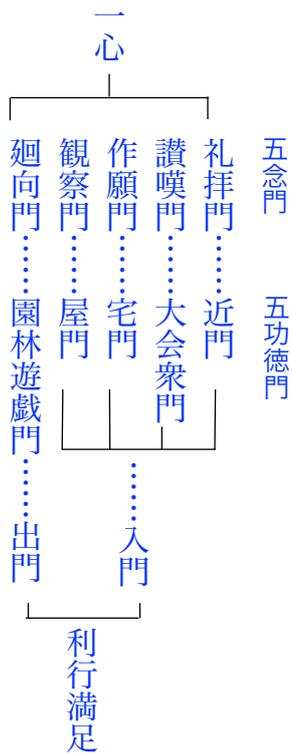
二には分極に約す。謂く、下に「自利利他速得菩提」と云う。彼の菩提の極果に対すれば、此五門は其の因行である。名づけて「利行満足」と云うは分極に約する義で、因行満足を顕すのである。

一、五果門

利行満足者 復有五種門 漸次成就五種功德 応知

何者五門 一者近門 二者大会衆門 三者宅門 四

者屋門 五者園林遊戯地門



一に現当に約す。謂く、五念の因行に依って彼土に於いて得る所のものを今の門となす。則ち、この五門は果である。

二には分極に約す。謂く、下に「自利利他速得菩提」と云う。彼の菩提の極果に対すれば、此五門は其の因行である。名づけて「利行満足」と云うは分極に約する義で、因行満足を顕すのである。

一、五果門

利行満足とは、また五種の門ありて、漸次に五種の功德を成就す、知るべし。

何者か五門。

- 一には近門、
- 二には大会衆門、
- 三には宅門、
- 四には屋門、
- 五には園林遊戯地門なり。

此五種示現入出次第相 入相中 初至浄土是近相

謂入大乘正定聚 近阿耨多羅三藐三菩提

入浄土已便入如来大会衆數

入衆數已当至修行安心之宅

入宅已当至修行所居屋□〔尤拳反〕

修行成就已 当至教化地 教化地即是菩薩自娛樂地

是故出門称園林遊戲地門

本章を大別して二となす。初めに正しく二利成就を明し（五因と五果）、後に「菩薩如是」より下は「速得菩提」を結示す。（五因と一果）  
今は正明中「総標」で、この中に論文と註釈とあること、以上の文の如し。

「復有五種門」。復とは重である。因の五念に対して重ねて果の五門を明す。故に「復」の字を置く。

「漸次成就」。次第に転進して漸に五果を成ず。広門の示現は自ら次第を存する故である。然るに五果の差別は但是れ一往の施設で、再往これを剋論すれば、

この五種は、入出の次第の相を示現す。入相のなかに、初めに浄土に至るは、これ近の相なり。いわく大乘正定聚に入りて、阿耨多羅三藐三菩提に近づくなり。浄土に入りをはれば、すなわち如来の大会衆の數に入るなり。衆の數に入りをはれば、まさに修行安心の宅に至るべし。宅に入りをはれば、まさに修行所居の屋宇に至るべし。修行成就しをはれば、まさに教化地に至るべし。教化地はすなわちこれ菩薩の自娛樂の地なり。このゆえに出門を園林遊戲地門と称す。

本章を大別して二となす。初めに正しく二利成就を明し（五因と五果）、後に「菩薩如是」より下は「速得菩提」を結示す。（五因と一果）  
今は正明中「総標」で、この中に浄土論の文と論註の釈とあること以上の文の如し。

「復有五種門」。復とは重である。因の五念に対して重ねて果の五門を明す。故に「復」の字を置く。

「漸次成就」。次第に転進して漸に五果を成ず。広門の示現は自ら次第を存する故である。然るに五果の差別は但是れ一往の施設で、再往これを剋論すれば、

其次は無次で、因位の五念、もとより定次なし。五果の成就、何ぞ次第あらむ。復五念の因行は既に此土に於いて円成ず。五念成ずるが故に能く彼国に生る。果徳の顕現、豈次第漸成あらむ。

然れども広門に約すれば無次中に於いて暫く次第相を立つ。乃ち、近門は余の四を具して五門の初に居る。大会衆亦然り。互具互撰して、次第亦歴然なり。因の五念の如き、行者の能修に定まれる次第なし。若し其修相を説けば必ず次第あり。説次第するが故に布列に次を存し、礼拝を始めとなし、廻向を終となす。因果相望して礼拝近門は其の初めにあり。既に初門あり。次第自ずから立って五五対説して無次に次を示す。是れ因果対説の法相である。

### 「五種功德」

五種門は果の五門を指し、五種功德は因の五念を言う。果徳の五門、能く因行の功德を成す。故に成就五種功德と云う。

其次は無次で、因位の五念、もとより定次なし。五果の成就、何ぞ次第あらむ。復五念の因行は既に此土に於いて円成ず。五念成ずるが故に能く彼国に生る。果徳の顕現、豈次第漸成あらむ。

然れども広門に約すれば無次中に於いて暫く次第相を立つ。乃ち、近門は余の四を具して五門の初に居る。大会衆亦然り。互具互撰して、次第亦歴然なり。因の五念の如き、行者の能修に定まれる次第なし。若し其修相を説けば必ず次第あり。説次第するが故に布列に次を存し、礼拝を始めとなし、廻向を終となす。因果相望して礼拝近門は其の初めにあり。既に初門あり。次第自ずから立って五五対説して無次に次を示す。是れ因果対説の法相である。

### 「五種功德」

五種門は果の五門を指し、五種功德は因の五念を言う。果徳の五門、能く因行の功德を成す。故に成就五種功德と云う。

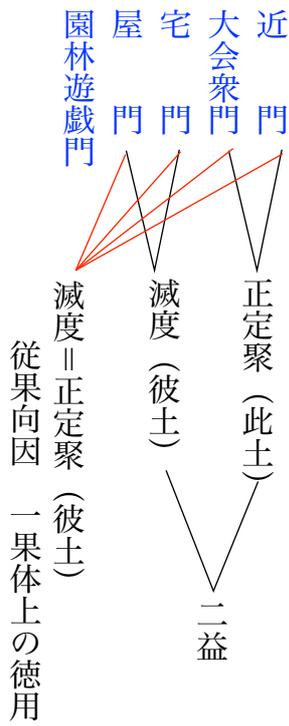
「大乘正定聚」

大乘は小乗に簡ぶ。正定聚は論及び註の意は、けだし初地を指すなるべし。既に凡夫を超ゆ。必定して当に仏果を得べきを念じて歓喜を生ず。此を「近菩提」と云う。

上に不虛作住持の見仏得益を明すに能得の菩薩を地上となす。浄土の果相豈此より降らんや。又、□初に十住論を引いて「即入大乘正定聚」という。彼論は初地を指して「不退」と云い、「必定」と言う。今亦同意なり。

問 論及註は所明の正定聚及び大会衆は彼土の所得とするに、我が宗祖は以って此土の所得となすものは如何。

答 此論文に二重の施設あり。



「大乘正定聚」

大乘は小乗に簡ぶ。正定聚は『論』及び『註』の意は、けだし初地を指すなるべし。既に凡夫を超ゆ。必定して当に仏果を得べきを念じて歓喜を生ず。これを「近菩提」と云う。

上に不虛作住持の見仏得益を明すに能得の菩薩を地上となす。浄土の果相豈此より降らんや。又、□初めに『十住論』を引いて「即入大乘正定聚」という。彼論は初地を指して「不退」と云い、「必定」と言う。今また同じ意なり。

問 論及註は明す所の正定聚及び大会衆は彼土の所得とするに、我が宗祖は以って此土の所得となすものは如何。

答 此の論の文に二重の施設あり。

而して宗祖はかく現当の益とせられたのは論及註の意を開顕せんとせられる活手段である。即ち初二は是れ現益にして因分、後の三は是れ当益にして果分である。宗祖は初二に於いて、時に、入正定聚と云うは、第一に第二を撰するのであり、時に入大会衆と云うは、第二に第一を撰するのである。

正信偈に「帰入功德大宝海 必獲入大会衆数」と二を一を撰して近門を挙げず。この二門、実は一の正定にして二なきを示す。

「帰入功德大宝海」は此土の信樂開發の一念である。大会衆門を以って、其信樂開發の一念に在らしむ。又、和讃に（十一の五）

「安樂国をねがふひと 正定聚にこそ住すなれ

邪定聚不定聚くになし 諸仏讚嘆したまへり」  
第一に第二を撰するのである。

後三を当得となす中、第三・四は往相の証果で、『文類』に「得入蓮華藏世界 即証真如法性身」と云うのがこれである。第五は是れ其の徳用で、即ち還相の利益、『文類』に「遊煩惱林現神通 入生死園示応化」と

而して宗祖はこのように現当の益とせられたのは論及註の意を開顕せんとせられる活手段である。即ち初の二は是れ現益にして因分、後の三は是れ当益にして果分である。

宗祖は初二に於いて、時に「入正定聚」と云うは、第一に第二を撰するのであり、時に「入大会衆」と云うは、第二に第一を撰するのである。正信偈に「帰入功德大宝海 必獲入大会衆数」と二を一を撰して近門を挙げず。この二門、実は一の正定にして二なきを示す。

「帰入功德大宝海」は此土の信樂開發の一念である。大会衆門を以って、其の信樂開發の一念に在らしむ。

又、和讃に（十一の五）

「安樂国をねがふひと 正定聚にこそ住すなれ

邪定聚不定聚くになし 諸仏讚嘆したまへり」  
第一に第二を撰するのである。

後三を当得となす中、第三・四は往相の証果で、『文類』に

「得入蓮華藏世界 即証真如法性身」と云うのがこれである。

第五は是れ其の徳用で、即ち還相の利益、『文類』に「遊煩惱林現神通 入生死園示応化」と云うもの、これである。

云うもの、これである。

(若し証文類の引用意に依れば、蓋し別意がある。即ち還相を明す下に、先ず論の第五門、及び、註の還相廻向の文を引き、次に広く此の註文を引く。乃ち別して第五を取ると、通じて五門を収むるとの二意あることを知るべし。其の別取は初二を因となし、後三を果となすの義に依り、其の通取は五皆因となすの義による。

凡そ還相と云うに二意あり。曰く、「従果還因」と「従浄還穢」と、これである。通収は従果還因の義により、別取は従浄還穢の義に依る。

若ししからば何故に此の二重の施設ありやと云うに、此れは上の起観生信に行信証の因果の二門を施設して、五念門として菩薩の身口意業・智業・方便智業を施設し安立して説く。即ち五念門を施設して此土の所修ならしめてある。今、正定を開いて近大二門とし、滅度を開いて宅屋二門とするは、其の五念の施設に分対するのである。

(もし証文類の引用の意に依れば、蓋し別意がある。即ち還相を明す下に、

先ず『論』の第五門、及び、『註』の還相廻向の文を引き、次に、広くこの『註』の文を引く。すなわち

別して第五を取ると、通じて五門を収むるとの二意あることを知るべし。

その別取は初二を因となし、後三を果となすの義に依り、その通取は五皆因となすの義による。

凡そ還相と云うに二意あり。

曰く、「従果還因」と「従浄還穢」と、これである。

通収は従果還因の義により、別取は従浄還穢の義に依る。

もしそうであるなら何故この二重の施設があるのか

これは上の「起観生信」に、行信証の因果の二門を施設して、五念門として菩薩の身口意業・智業・方便智業を施設し安立して説く。

即ち五念門を施設して此土の所修ならしめてある。

今、正定を開いて近門・大会衆門の二門とし、滅度を開いて宅門・屋門の二門とするのは、その五念の施設に分対するのである。

扱（さて、ところで）、近大二門を宅屋二門と同じく彼土に在らしむるは、五念を施設して、五つ乍ら此土の所修とするに對して、二益を施設して五つ乍ら彼土の所得とせられたるものである。五五の相對であり、彼此の（二土）相對である。皆、五念門に對して施設せるものである。

## 第二門 大会衆門

### 「便入大会衆數」

近門は初至淨土、大会衆門は淨土に入れば直ちにそのまま大会衆の數に入る。大会衆とは仏の說法の會座に列なる大衆のこと。其の數に入ること。以上の二は現生一の正定聚を分つて二門として彼土にあらしむる也。

小經に言く「諸上善人俱會一處」と

大經に言く「無量壽佛、爲諸聲聞 菩薩大衆、班宣法時、都悉集會 七寶講堂」

既に此土に於いて觀音勢至を其勝友となす。彼土に至つて顯現す。

ところで

近・大二門を宅・屋二門と同じく彼土に在らしむるは、五念を施設して、五つながら此土の所修とするに對して、二益を施設して、五つながら彼土の所得とせられたるもの。五五の相對であり、彼此の（二土）相對である。皆、五念門に對して施設せるものである。

## 第二門 大会衆門

### 「便入大会衆數」

近門は初めて淨土に至る、大会衆門は淨土に入れば直ちにそのまま大会衆の數に入る。大会衆とは仏の說法の會座に列なる大衆のこと。その數に入ること。

以上の二は現生、

一つの正定聚を分つて二門として彼土にあらしむるのである。

小經に言く

「諸もろの上善人と俱に一處に會す」と

大經に言く

「無量壽佛、諸聲聞 菩薩大衆の爲に、法を班宣したもう時、都悉く七寶講堂に集會す」

既に此土に於いて觀音勢至をその勝友となす。彼土に至つて顯現す。

第三門 宅門

修行安心宅

「入衆數已 当至修行安心之宅」

修行安心の宅に至る位

修行は総、安心は別。安は安住、心を一処に安住せしめて絶えて動乱無し。故に安心という。即ち大奢摩他寂靜三昧なり。

「宅」は境地に名づく。

『字彙』に「宅は居なり、屋なり」と。

『説文』には「宅は託なり、人の投託する所なり」と。

『釈名』には「宅は扱なり。吉処を揀扱して之を営なり。

吉処を占めて余に移らざるを以って寂靜止に喩えて宅というもの。

第四門 屋門

修行所居屋寓

「入宅已 当至修行所居屋寓」

「屋」は

第三門 宅門

修行安心の宅

「衆の數に入り已りぬれば 当に修行安心之宅に至るべし」

修行安心の宅に至る位

修行は総、安心は別。

安は安住、心を一処に安住せしめて絶えて動乱無し。故に安心という。

即ち大奢摩他寂靜三昧なり。

「宅」は境地に名づく。

『字彙』に「宅は居なり、屋なり」と。

『説文』には「宅は託なり、人の投託する所なり」と。

『釈名』には「宅は扱なり。吉処を揀扱して之を営なり。

吉処を占めて余に移らざるを以って寂靜止に喩えて宅というもの。

第四門 屋門

修行所居屋寓

「宅に入り已れば 当に修行所居屋寓に至るべし」

「屋」は

『字彙』に「寓同宇屋之四垂為宇」

『説文』に「屋邊世」という。

今の意は寓亦是れ屋で、別義を存するに非ず。

屋舎中に居住して飲食寤寐するを以て毘婆舍那の受用種々法味楽に喩えたもの、今現在説法に列なりて法味を受用するなり。

宅屋の義、大に同じ。ただ字に寄せて別を示すなり。

#### 第五門 園林遊戯地門

園林遊戯地

「修行成就已 当至教化地 教化地即是菩薩自娛樂地 是故出門称園林遊戯地門」

更に屋舎を出でて園林に逍遙するを以って十方に遊化するの義を顕す。娛樂は二字ともにたのしむと訓ず。出門とは衆生化益に出る門と云う義。

「園林」に二義あり。

『字彙』に「寓同宇屋之四垂為宇」

『説文』に「屋邊世」という。

今の意は、寓亦是れ屋で、別義を存するに非ず。

屋舎中に居住して飲食寤寐するを以て毘婆舍那の受用種々法味楽に喩えたもの、今現在説法に列なりて法味を受用するなり。宅屋の義、大に同じ。ただ字に寄せて別を示すなり。

#### 第五門 園林遊戯地門

園林遊戯地

「修行成就しをはれば、まさに教化地に至るべし。教化地はすなわちこれ菩薩の自娛樂の地なり。このゆえに出門を園林遊戯地門と称す。」

更に屋舎を出でて園林に逍遙するを以って十方に遊化するの義を顕す。娛樂は二字ともにたのしむと訓ず。出門とは衆生化益に出る門と云う義。

「園林」に二義あり。

一、六十華嚴第三十八にいわく

「有十種園林 何等為十 所謂生死園林 行菩薩行  
不起憂惱故 教化衆生園林 不厭衆生故 一切劫園  
林 撰取菩薩一切大行故 清淨世界園林 性無著故  
一切魔宮殿園林 降魔境界故 聽受正法園林 正念觀  
察故 六波羅蜜四法三十七道品園林 修習慈父境界故  
十力無所畏 乃至 一切佛法園林。不念異法故 菩  
薩示現一切無量無辺功德神力園林 轉淨法輪 調伏衆  
生故 於念念中為一切衆生現成正覺園林 法身如虛空  
充滿一切世界 平等覺故。仏子は為菩薩摩訶薩十種園  
林 若菩薩摩訶薩住此園林 則得如來無上離憂快樂園  
林」

生死は菩薩の園林なり。園林は遊戯して厭捨なき  
処。菩薩生死の迷界に入りて衆生を度するを欣うこ  
と、恰も園林に入りて遊戯厭捨なきが如きが故なりと  
なす。

一、六十華嚴第三十八にいわく

「有十種園林 何等為十 所謂  
生死園林 菩薩行を行じて憂惱を起さざるが故に  
衆生教化の園林なり 衆生を厭わざるが故なり  
一切劫の園林なり 菩薩一切大行を撰取するが故に  
清淨世界の園林なり 性無著故に  
一切魔宮殿の園林なり 魔の境界を降す故に  
聽受正法の園林なり 正念觀察故に  
六波羅蜜四法三十七道品園林なり  
慈父の境界を修習するが故に  
十力無所畏 乃至 一切佛法の園林なり。  
異法を念ぜざるが故に。  
菩薩が一切無量無辺功德神力を示現する園林なり。  
淨法輪を轉じ、衆生を調伏するが故に  
念念中に於いて、一切衆生現成正覺の為の園林なり。  
法身は虚空の如く一切世界に充滿す。 平等覺の故に。

仏子よ、これを菩薩摩訶薩の十種の園林と為す。

若し菩薩摩訶薩がこの園林に住せば

則ち如來の無上離憂快樂園林を得るなり」

生死は菩薩の園林なり。

園林は遊戯して厭捨なき処。

菩薩が生死の迷界に入りて衆生を度するを欣うこと、  
あたかも園林に入りて遊戯厭捨なきが如きが故なりとなす。

二、『十地經』の意に依れば、生死の苦果を園に喩ふ。「園」は果実を取る処なるが故に。煩惱の衆多を「林」に喩ふ。「林」は樹木稠密なるが故に。「遊戯」とは、菩薩の衆生を濟度するは恰も遊戯の如く楽しきが故に云う。地とは場所を云わんが如し。

問曰く。滅度を開いて宅屋二門とする。何故に施設して正修行の位とするや。

答云 此れ園林遊戯地門の義に位するを以てなり。其の実は園林遊戯地は果後の行なり。和讃に

「願土にいたればすみやかに無上涅槃を証してぞ

すなはち大悲をおこすなり これを回向となづけたり」

無上涅槃を証すとは果極を云う。「てぞ」の二字は

「已に無上涅槃を証して」の義。大悲を起こすはその後にあり。しかれども此の利他大悲は大菩薩行の正意とする処、『証卷』には「還相回向は利他の正意を顕す」とのたまふ。利他の正意とは、利他即正意なり。利他行即菩薩行の正意とする処なり。是を以て因中に行すべきである。

二、『十地經』の意に依れば、生死の苦果を園に喩ふ。

「園」は果実を取る処なるが故に。

煩惱の衆多を「林」に喩ふ。「林」は樹木稠密なるが故に。

「遊戯」とは、

菩薩の衆生を濟度するは恰も遊戯の如く楽しきが故に云う。

「地」とは場所を云わんが如し。

問いて曰く。滅度を開いて宅・屋二門とする。

何故に施設して正修行の位とするや。

答えて云く。これ園林遊戯地門の義に位するを以てなり。

其の実は園林遊戯地は果後の行なり。

和讃に

「願土にいたればすみやかに無上涅槃を証してぞ

すなはち大悲をおこすなり これを回向となづけたり」

無上涅槃を証すとは果極を云う。

「てぞ」の二字は「已に無上涅槃を証して」の義。

大悲を起こすはその後にあり。

しかれども此の利他大悲は大菩薩行の正意とする処、

『証卷』には「還相回向は利他の正意を顕す」とのたまふ。

利他の正意とは、利他即正意なり。

利他行即菩薩行の正意とする処なり。

是を以て因中に行すべきである。

それを必ず成就せんことを欲して、果後に回すことが浄土門の聖道に異なる処。果後に回すは因中の利他行を必ず出来ませんが為である。果後なれば必ず成就す。これに由つて果後の利他行を『論』は施設して、因中の行とす。而して宅屋二門は其の利他行の園林遊戯の前に位する。これ正修行の位とせざるべからざる所以なり。

## 第二講 正釈入出二門

### 一、入出功德

入とは安楽浄土に入るを云い、初入・入極と通じて入と名け、入り已りて生死界に還出するを出と名ける。共に此土より名を立てる。猶、往還と云うが如し。入は自利を意味し、出は利他を云う。「此五種門」とは五果門を云う。此の五種門中、初めの四種の門は入の功德を成就し、後の一種、即第五門は出の功德を成就する。

「入出功德」とは因の五念を指す。

それを必ず成就せんことを欲して、果後に回すことが浄土門の聖道に異なる処。果後に回すは因中の利他行を必ず出来ませんが為である。果後なれば必ず成就す。これに由つて果後の利他行を『論』は施設して、因中の行とす。而して宅屋二門は其の利他行の園林遊戯の前に位する。これが正修行の位とせざるべからざる所以なり。

## 第二講 正釈入出二門

### 一、入出功德

入とは安楽浄土に入るを云い、初入、入極を通じて「入」と名け、入り已りて生死界に還出するを「出」と名ける。共に此土より名を立てる。猶、「往還」と云うが如し。入は自利を意味し、出は利他を云う。

「此五種門」とは五果門を云う。

此の五種門中、初めの四種の門は、入の功德を成就し、後の一種、即ち第五門は、出の功德を成就する。

「入出功德」とは因の五念を指す。

五念門は是れ入出が為の功德である。故に五念門を指して入出功德と云う。因の功德なくして浄土への入出は不可能である。因の五念門の成就する処、任運自然に浄土への入出は自在である。五果門中、初四門は四念門の成就満足して益を得たる相である。故に入功德成就と云う。出功德とは第五の回向門である。今、第五園林遊戯地門は回向門の成就満足して利益を得たる相である。仍て成就出功德と云う。

起観生信も五念は因にあり。この章の五成就門も猶因にあり。しかれども五念門は此土にあり、五成就門は彼土にありて、此土に五念門、夫れが彼土に至つて初めて成就満足し、各々の益を得るが此の利行満足の五門である。二の五門あれども未だ果極の位を論ぜず。此れは浄土の大菩薩行を安立する用より起こる施設門である。若し其の実義は起観生信の五念は行と信と証とにして因果の行である。利行満足章の五門は正定滅度の二にして、因益果益である。もつとも一家四法の建立、因の行信は行に就いて安立し、果の証は益に就いて安立する。因の行信は因の正定の益あれど

五念門は是れ入出が為の功德である。故に五念門を指して入出功德と云う。

因の功德なくして浄土への入出は不可能である。

因の五念門の成就する処、任運自然に浄土への入出は自在である。

五果門中、初四門は四念門の成就満足して益を得たる相である。

故に「入功德成就」と云う。

出功德とは第五の回向門である。

今、第五園林遊戯地門は

回向門の成就満足して利益を得たる相である。

仍て「成就出功德」と云う。

起観生信も五念は因にあり。この章の五成就門も猶因にあり。

しかれども五念門は此土にあり、五成就門は彼土にありて、

此土に五念門、夫れが彼土に至つて初めて成就満足し、

各々の益を得るが此の利行満足の五門である。

二の五門あれども未だ果極の位を論ぜず。

此れは浄土の大菩薩行を安立する用より起こる施設門である。

若し其の実義は

起観生信章の「五念」は、行と信と証とにして、因果の行である。

利行満足章の「五門」は正定滅度の二にして、因益・果益である。

もつとも一家四法の建立、

因の行信は行に就いて安立し、

果の証は益に就いて安立する。

因の行信は因の正定の益あれども、それは別に立せず。

も、それは別に立せず。果滅度の位にも果後の任運行の奢摩他毘婆舍那あれども、夫れも別立せず。此れ四法の建立なり。しかれども其の實を論ずれば行に因行果行あり。益に因益果益あり。其の因行果行を起觀生信に於て五念と施設し、因益果益を此の利行満足章に於て五成就門と施設する。

## 一、入功德

### (1) 第一門

「入第一門者 以礼拝阿弥陀仏 為生彼国故 得生安樂世界 是名入第一門 礼仏願生仏国是初功德相」

五門の果徳を明して五念の成就を顕す。是の故に五果の一一に皆五念を挙げて入出の所由となす。

今、先ず第一門を明かす。礼拝等は因を挙げて由を示し、「得生安樂世界」果を説いて益を顕す。五念五門の各々対配は是れ一往の義にして、再往は然らず。五念成就して彼土に生まるることを得るので、五念が別時に顕現するのではない。前に述べるが如し。

果滅度の位にも果後の任運行の奢摩他毘婆舍那あれども、夫れも別立せず。此れ四法の建立なり。しかれども其の實を論ずれば行に因行果行あり。

益に因益果益あり。其の因行果行を 起觀生信章に於て「五念」と施設し、因益果益を此の利行満足章に於て「五成就門」と施設する。

## 一、入功德

### (1) 第一門

「入第一門とは、阿弥陀仏を礼拝し、かの国に生ぜんとなすをもつてのゆえに、安樂世界に生ずることを得。これを入第一門と名づく。仏を礼して仏国に生ぜんと願ず。これ初めの功德の相なり。」

五門の果徳を明して五念の成就を顕す。

この故に五果の一一に皆五念を挙げて入出の所由となす。

今、先ず第一門を明かす。

礼拝等は因を挙げて由を示し、

「得生安樂世界」果を説いて益を顕す。

五念五門の各々対配は是れ一往の義にして、再往は然らず。

五念成就して彼土に生まるることを得るので、

五念が別時に顕現するのではない。

前に述べるが如し。

其の一往の施設は行の優劣を分かつ教道に准じたもの。礼仏願生等、ただ因の功德をのみ出すのである。礼仏願生は礼拝門の相。

## (2)第二門

「入第二門者 以讚嘆阿弥陀仏 随順名義称如来名 依如来光明智相修行故 得入大会衆数 是名入第二門 依如来名義讚嘆 是第二功德相」

初めに因を挙げて由を示し、後に得入等と果を説いて益を顕す。初めの中に賛嘆等の一句は総じて賛嘆の義を標し、随順などの四句は別して如実行を示す。

随順名義称如来名||名義に対して明かし

依如来光明智相修行故||光明に対して明かす

「随順」と「依」とは其実に称ふことを明し

「称名」と「修行」とは、其の行相を明す。

如実の讚嘆によって大会衆の数に入る。此れ讚嘆門の成就満足して得る処の益である。因って讚嘆門に「以故」の二字を加えて挙る。

釈文には名義を依として讚嘆することを示す。これ

其の一往の施設は行の優劣を分かつ教道に准じたもの。礼仏願生等、ただ因の功德をのみ出すのである。礼仏願生は礼拝門の相。

## (2)第二門

「入第二門とは、阿弥陀仏を讚嘆し、名義に随順して如来の名を称し、如来の光明智相によりて修行するをもつてのゆえに、大会衆の数に入ることを得。これを入第二門と名づく。如来の名義によりて讚嘆す。これ第二の功德相なり。」

初めに因を挙げて由を示し、後に得入等と果を説いて益を顕す。初めの中に

「賛嘆」等の一句は総じて賛嘆の義を標し、

「随順」等の四句は別して如実行を示す。

随順名義称如来名||名義に対して明かし

依如来光明智相修行故||光明に対して明かす

「随順」と「依」とは其実に称ふことを明し

「称名」と「修行」とは、其の行相を明す。

如実の讚嘆によって大会衆の数に入る。

これ讚嘆門の成就満足して得る処の益である。因って讚嘆門に「以故」の二字を加えて挙る。釈文には名義を依として讚嘆することを示す。これが因の功德相である。

が因の功德相である。

『撮要』にいわく「讚嘆阿弥陀仏とは広く三種莊嚴を嘆ずるなり。主を挙げて伴を摂し、正を挙げて依を摂す。ただ阿弥陀仏と言うて名号と言わず、古人の称名一行を讚嘆となすもの非なり」と云う。然れども『註』には「依如来名義讚嘆」と云う。称名一行となすこと明らかなり。

### (3)第三門

「入第三門者 以一心専念作願生彼国 修奢摩他寂靜三昧行故 得入蓮華藏世界 是名入第三門

為修寂靜止故 一心願生彼国 是第三功德相」

先ず『論』文の「一心専念」等は因を挙げ、「得入」以下は果を示す。

文に二種の訓点有り。

「以……作願生彼 修奢摩他寂靜三昧行故」とすれば、奢摩他は此土の所修となり

「以……作願生彼 修奢摩他寂靜三昧行故」と訓ずれば、奢摩他は彼土の所修となる。

『撮要』にいわく

「讚嘆阿弥陀仏とは広く三種莊嚴を嘆ずるなり。主を挙げて伴を摂し、正を挙げて依を摂す。ただ阿弥陀仏と言うて名号と言わず、古人の称名一行を讚嘆となすもの非なり」と云う。然れども『論註』には「依如来名義讚嘆」と云う。称名一行となすこと明らかなり。

### (3)第三門

「入第三門とは、一心専念にかの国に生ぜんと作願し、奢摩他寂靜三昧の行を修するをもつてのゆえに、蓮華藏世界に入ることを得。これを入第三門と名づく。寂靜止を修せんがためのゆえに、一心にかの国に生ぜんと願す。これ第三の功德相なり。」

先ず『論』文の

「一心専念」等は因を挙げ、「得入」以下は果を示す。

文に二種の訓点有り。

「彼に生ぜんと作願して 奢摩他寂靜三昧行を修するを以つて…の故に」とすれば、奢摩他は此土の所修となり

「彼に生じて奢摩他寂靜三昧行を修するを作願して…以つての故」と訓ずれば、奢摩他は彼土の所修となる。

然るに、奢摩他しゃまたと毘婆舍那びばしゃなとは一具の行である。而して次の『論』文の毘婆舍那は此土の所修となす。彼に望むる時、彼此二土止観互顕と見るべし。祖訓は後義の意。

「一心専念」は上の讚嘆門の随順名義の相である。

一心に称名して作願して浄土に往生するなり。

「奢摩他寂靜三昧行」とは、身口意の三業に悪心を起こさず、心に声聞縁覚の二乗心を止むること。故に奢摩他毘婆舍那は大乗心である。仍よつて蓮華蔵世界に入るのである。

「入蓮華蔵世界」此の名は元、『華嚴経』盧舍那品るしやなに出づ。彼華嚴蔵世界は則ち舍那の自境界を説く。是れ因、人の知見する所に非ず。

『探玄』一に云く「蓮華蔵海 因人非及故 須光力方可見也」と。

今此の『論』中、彼華蔵界の名を採り来りて、唯仏自境界を顕す。彼外事方量嚴飾等の相を取るに非ず。彼は徳を以って相に施し、蓮華蔵海広長の相を説く。今は相を撰して徳に歸し彼華嚴の名を以って唯仏の自境

然るに、奢摩他しゃまたと毘婆舍那びばしゃなとは一具の行である。而して次の論の文の毘婆舍那は此土の所修となす。彼に望むる時、彼此二土止観互顕と見るべし。祖訓は後義の意。

「一心専念」は上の讚嘆門の随順名義の相である。

一心に称名して作願して浄土に往生するなり。

「奢摩他寂靜三昧行」とは、身口意の三業に悪心を起こさず、心に声聞縁覚の二乗心を止むること。

故に奢摩他毘婆舍那は大乗心である。仍よつて蓮華蔵世界に入るのである。

「入蓮華蔵世界」

この名は元、『華嚴経』盧舍那品るしやなに出づ。

彼の華嚴蔵世界は則ち盧舍那の自境界を説く。是れ因、人の知見する所に非ず。

『探玄』一に云く

「蓮華蔵海 因人非及故 須光力方可見也」と。

(蓮華蔵海は、因、人及ばざるが故に光力をもって方に見るべきなり)

今この『論』中、彼華蔵界の名を採り来りて、唯仏自境界を顕す。彼外事方量嚴飾等の相を取るに非ず。

彼は徳を以って相に施し、蓮華蔵海広長の相を説く。

今は相を撰して徳に歸し、彼の華嚴の名を以って唯仏の自境を標し、以って証人の地を示す。

を標し、以って証入の地を示す。

而して此中は五門次第の果相を明す。故に先ず浄土に生れて菩提に近づく、名けて「近門」と為し、進んで大会衆数に入るを第二門と為し、更に転進して本仏自証の地に入るを「修行安心の宅」と名づく。此れ安心の処に至るを入蓮華蔵界という。即ち仏の自境界を指して蓮華蔵世界と名づける。安樂と蓮華蔵と二種の別あるに非ず。極樂無為涅槃界と云い、清浄莊嚴と現わす。これ皆、蓮華蔵世界の謂である。彼の安樂浄土の莊嚴は唯仏与仏の知見の故に、一度彼国に生ずれば則ち其の境に入る。安樂と華蔵と名異体一である。而るに今、先ず浄土に入り、後、華蔵世界に入ると説くは暫く五門の次第を立て、其の浅深を施設するのみ。名で釈せば、『探玄』三に「蓮華」を釈して、初めに「真如」となし、後に「如来願力所感大宝蓮華王為浄土依止」と云い、「蔵」とは「含摂義出生義具徳義 世是時、界是分齊 謂於時中 分齊顕現」と云う。今、准釈せば、弥陀の正覚の大蓮華王にして、事理不二の故に事華即法華、因果不二の故に此華即ち願力。

而して此中は五門次第の果相を明す。

故に先ず浄土に生れて菩提に近づく、名けて「近門」と為し、進んで大会衆数に入るを第二門と為し、更に転進して本仏自証の地に入るを「修行安心の宅」と名づく。此れ安心の処に至るを「入蓮華蔵界」という。即ち仏の自境界を指して「蓮華蔵世界」と名づける。

安樂と蓮華蔵と二種の別あるに非ず。

極樂無為涅槃界と云い、清浄莊嚴と現わす。

これ皆、蓮華蔵世界の謂である。

彼の安樂浄土の莊嚴は唯仏与仏の知見の故に、

一度彼国に生ずれば則ち其の境に入る。

安樂と華蔵と名異体一である。

而るに今、先ず浄土に入り、後、華蔵世界に入ると説くは

暫く五門の次第を立て、其の浅深を施設するのみ。

名で釈せば、『探玄』三に

「蓮華」を釈して、初めに「真如」となし、

後に「如来願力所感大宝蓮華王為浄土依止」と云い、

「蔵」とは「含摂義出生義具徳義 世是時、界是分齊 謂於時中 分

齊顕現」と云う。

今、准釈せば、弥陀の正覚の大蓮華王にして、

事理不二の故に事華即法華、

因果不二の故に此の華、即ち願力。

上に如来浄華と曰い、或いは正覚華と曰う。經には衆宝蓮華周滿世界と云う。此れ乃ち十方衆生往生の所座であつて願力成就、願力所成なるが故に仏の正覚華と無二無別である。十方往覲おうきんは是れ含摂の義、華光出仏は是れ出生の義、無量功德宝性の莊嚴は是れ具徳の義、此華の周滿せる国土、此を蓮華蔵世界と云う。世界と云うは因順余方の□である。特に第三門に此の名あるものは寂靜三昧は即ち入一法句の故に、一切如来の自証真如を指して蓮華蔵界と云うに應ずるのである。

『探玄』三に云く「三世諸仏嚴華蔵界」等。而して次の屋門の受用種々法味樂に対するのである。彼は意は広観なるが故に。

### 「為修寂靜止故」

亦二義あり。

一に云く、上の『論』に「欲如実修行奢摩他故」と云う。今其の意に依つて「為修故」と云う。然るに上行相を先にして所由を後にする。今は即ち之に反すと。此は修寂靜止を此土の行とする義。

上に如来浄華と曰い、或いは正覚華と曰う。經には衆宝蓮華周滿世界と云う。

これ乃ち十方衆生往生の所座であつて願力成就、願力所成なるが故に仏の正覚華と無二無別である。

十方往覲おうきんはこれ含摂の義、華光出仏はこれ出生の義、

無量功德宝性の莊嚴はこれ具徳の義、

此の華の周滿せる国土、これを蓮華蔵世界と云う。

「世界」と云うは因順余方の称である。

特に第三門に此の名あるものは

寂靜三昧は即ち入一法句の故に

一切如来の自証真如を指して蓮華蔵界と云うに應ずるのである。

『探玄』三に云く「三世諸仏嚴華蔵界」等。

而して次の屋門の「受用種々法味樂」に対するのである。

彼は意は広観なるが故に。

### 「為修寂靜止故」

亦二義あり。

一に云く、上の『浄土論』に「欲如実修行奢摩他故」と云う。

今其の意に依つて「為修故」と云う。然るに

上行相を先にして所由を後にする。

今は即ち之に反すと。

此は修寂靜止を此土の行とする義。

一に云く、「**為修寂靜止**」等は所期の果相にして、一心願生彼国は能期の行相なりと。此れは「**修寂靜止**」を彼土の修行とする義。今は後説に従う。次の第四門の注釈に生後に於いて毘婆沙那を云うに順ずるが故に。

「止」を此土の止となす説に於いては此土の止は一  
心作願するなり。仏の名号の力で行者の諸の悪を止め  
給う。此れ此土の止なり。即ち此土の止は一心作願の  
往相なり。因みに今、「以故」の二字は願生するは其止  
を見かけて願生する。故に「以故」と云う。止を得ん  
として願生するとなす。学者中、これによるものあり。

#### (4)第四門

「入第四門者 以專念觀察彼妙莊嚴 修毘婆舍那故  
得到彼處 受用種種法味樂 是名入第四門

種種法味樂者 毘婆舍那中 有觀仏国土清淨味 撰  
受衆生大乘味 畢竟住持不虛作味 類事起行願取仏土  
味 有如是等無量莊嚴仏道味 故言種種 是第四門功

徳相」

一に云く、  
「**為修寂靜止**」等は所期の果相にして、  
「一心願生彼国」は能期の行相なりと。  
これは「**修寂靜止**」を彼土の修行とする義である。

今は後説に従う。

次の第四門の注釈に生後に於いて毘婆沙那を云うに順ずるが故に。

「止」を此土の止となす説に於いては  
此土の止は一心作願するなり。  
仏の名号の力で行者の諸の悪を止め給う。  
此れ此土の止なり。

即ち此土の止は一心作願の往相なり。  
因みに今、「以故」の二字は  
願生するは其止を見かけて願生する。故に「以故」と云う。  
止を得んとして願生するとなす。学者中、これによるものあり。

#### (4)第四門

入第四門とは、專念にかの妙莊嚴を觀察し、毘婆舍那を修す  
るをもつてのゆえに、かの処に到りて種々の法味樂を受用する  
ことを得。これを入第四門と名づく。

「種々の法味樂」とは、毘婆舍那のなかに、觀仏国土清淨味・撰  
受衆生大乘味・畢竟住持不虛作味・類事起行願取仏土味あり。  
かくのごとき等の無量の莊嚴仏道の味あるがゆえに「種々」と  
いう。これ第四の門の功德相なり。

#### 第四屋門

「入第四門」とは蓮華藏世界に入り畢つて、法味樂を受用する。此れは第四の觀察門の成就満足して益を得る相である。故に觀察に「以故」の二字を加ふ。

「專念觀察」等は因を挙げて「得到彼所」等は果を示す。心を淨境に係て移らざるを專念と云う。乃ち是れ思惟位で、正受の前方便なり。觀察は是れ正受にして了了に三種莊嚴を照らすのである。

「毘婆沙那」は上の觀察を指す。即ち此土所修の行相を示す。彼所は上の蓮華藏界を指す。仏自証の境に到りて法味樂を受用するを屋門の徳となす。是れ其の入極なり。「法味樂」とは無漏の大智が法を甘するを云う。法とは有為の世樂に揀ぶの言。淨影云く、「甘法名味」(大乘義章に出づ)と。

「毘婆沙那中」等。此土の觀境に約して其の徳相を示す。故に毘婆沙那中と云う。此に在りて之を觀じ、彼に至りて受用す。境界別なきが故なり。亦可。毘婆沙那の言、彼土に通ず。起觀生信章の釈に止觀各此彼二土に通ぜしめ、廻向釈、還相の下に「生彼土已得奢

#### 第四屋門

「入第四門」とは蓮華藏世界に入り畢つて、法味樂を受用する。此れは第四の觀察門の成就満足して益を得る相である。故に觀察に「以故」の二字を加ふ。

「專念觀察」等は因を挙げて得到彼所等は果を示す。心を淨境に係て移らざるを專念と云う。乃ち是れ思惟位で、正受の前方便なり。

觀察は是れ正受にして了了に三種莊嚴を照らすのである。「毘婆沙那」は上の觀察を指す。即ち此土所修の行相を示す。彼所は上の蓮華藏界を指す。

仏自証の境に到りて法味樂を受用するを屋門の徳となす。是れ其の入極なり。

「法味樂」とは無漏の大智が法を甘するを云う。法とは有為の世樂に揀ぶの言。

淨影云く、「甘法名味」(『大乘義章』に出づ)と。「毘婆沙那中」等。此土の觀境に約して其の徳相を示す。故に毘婆沙那中と云う。

此に在りて之を觀じ、彼に至りて受用す。

境界別なきが故なり。亦可。毘婆沙那の言、彼土に通ず。

起觀生信章の釈に止觀各此彼二土に通ぜしめ、廻向釈、還相の下に「生彼土已得奢摩他毘婆沙那成就」と云う。今亦同意なり。

摩他毘婆沙那成就」と云う。今亦同意なり。

「種々法味樂」等の釈文に不審あり。受用法樂は入第四門の体である。第四の功德には非ず。第四の功德と云うのは利行満足の第四門である。然るに今其の法味樂を釈して四種を挙げて、夫れを第四功德相と結す。義通ぜざるに似たり。是は本觀察門の二十九種の觀察は果後の受用法樂を仮に施設して、因中に觀察門としたるもの、果後受用法樂が第四屋門中に入り来つてある。乃て、今受用法樂を第四の功德相と結す。

「觀仏国土清淨味」とは、觀とは受用の義、無漏の智が依正の妙淨を受用するなり。此下四味を以つて二十九種を撰する。

第一は清淨功德で、国土十七種の中の総を挙げて別を撰す。即ち国土清淨功德を觀するのである。

第二「撰取衆生大乘味」とは、大義円功德を觀する也。別の十六句中、平等一味を挙げて、以つて上の清淨の徳は是れ主伴同じく受用する所なることを顯して清淨の義を成ず。善惡等の諸機を撰受して、大乘一味ならしむ。故に「撰受衆生大乘」と云う。

「種々法味樂」等の釈文に不審あり。

受用法樂は入第四門の体である。第四の功德には非ず。第四の功德と云うのは利行満足の第四門である。然るに今其の法味樂を釈して四種を挙げ、それを第四功德相と結す。義通ぜざるに似たり。

是は本觀察門の二十九種の觀察は

果後の受用法樂を仮に施設して、因中に觀察門としたるもの、果後受用法樂が第四屋門中に入り来つてある。乃て、今受用法樂を第四の功德相と結す。

「觀仏国土清淨味」とは、觀とは受用の義、

無漏の智が依正の妙淨を受用するなり。此下四味を以つて二十九種を撰する。

第一は清淨功德で、国土十七種の中の総を挙げて別を撰す。即ち国土清淨功德を觀するのである。

第二「撰取衆生大乘味」とは、大義円功德を觀する也。

別の十六句中、平等一味を挙げて、以つて上の清淨の徳は是れ主伴同じく受用する所なることを顯して清淨の義を成ず。善惡等の諸機を撰受して、大乘一味ならしむ。故に撰受衆生大乘と云う。

第三「畢竟住持不虛作味」とは、不虛作功德を觀する也。仏八句の中の最勝に□て、余の七を撰す。畢竟は尽際不差を謂う。虚妄業作の不能住持に揀ぶ。

「類事起行願取仏土味」とは菩薩の四種を挙げて以つて不虛作の速滿宝海の往相を顕す。

「類事起行」は供養諸仏で、淨穢の諸国に到りて作す所の事業が其の国の所応に類同するを類事と云い、供養諸仏を起行と云う。衆生を觀發して淨土を願求せしむるを願取仏土と云う。或は云く、「類事起行は随類応同で、願取仏土は八相作仏なり」と。

## 一、出功德

### (5)第五門

「出第五門者 以大慈悲 觀察一切苦惱衆生 示應化身 廻入生死園煩惱林中 遊戲神通 至教化地 以本願力廻向故 是名出第五門」

『論』文の中、初めに果を説いて益を顕し、後に「以本」等と因を挙げて由を示す。

上の四門は因を先にし、果を後にす。今此中は之に

第三「畢竟住持不虛作味」とは、不虛作功德を觀する也。仏八句の中の最勝に□て、余の七を撰す。

畢竟は尽際不差を謂う。虚妄業作の不能住持に揀ぶ。

「類事起行願取仏土味」とは

菩薩の四種を挙げて以つて不虛作の速滿宝海の往相を顕す。

「類事起行」は供養諸仏で、

淨穢の諸国に到りて作す所の事業が

其の国の所応に類同するを「類事」と云い、

供養諸仏を「起行」と云う。

衆生を觀發して淨土を願求せしむるを「願取仏土」と云う。

或いは云く、

「類事起行は随類応同で、願取仏土は八相作仏なり」と。

## 一、出功德

### 第五門

「出第五門とは、大慈悲をもつて一切苦惱の衆生を觀察して、応化身を示して、生死の園、煩惱の林のなかに廻入して遊戲し、神通もつて教化地に至る。本願力の回向をもつてのゆえなり。これを出第五門と名づく。」

『浄土論』の文の中、

初めに果を説いて益を顕し、

後に「以本」等と因を挙げて由を示す。

上の四門は因を先にし、果を後にす。今此中は之に反す。

反す。文に前後あるも義に別なし。大慈悲は因果に通ず。今施説門では出第五門は猶菩薩の因位にあり、爾れども大慈悲と云うに妨なし。上の四は皆智、今はこれ大悲、五門は即ち是れ悲智なり。觀察は方便備省で、之を出化の本となす。此れは是れ能起。

「示応化身」等とは是れ所起、中に於いて応化身は能化の身で生死園煩惱林は起化の処、亦所化の機、生死は是れ果、煩惱は是れ因、苦果は園に喩え、苦因は林に喩ふ。園の園たる所以は林□あるを以つてなるに同じく、生死の生死たるは煩惱あるに由る。菩薩の生死を觀るや、生死即ち涅槃にして、別に廻入すべき処なし。今、其の廻入する所以は衆生の煩惱稠林の如くなるを度せんが為である。智に應ずる悲、見るべし。「神通」とは総じて六通をさす。一切の作用、壅るなきを「通」と云い、所為靈妙にして凡夫の測る所に非ざるを「神」と云う。「教化地」とは、教化は誨諭轉換に名け、地は所赴の處に名づく。

「以本願力廻向故」とは、本願力に二種の義あり。『六要抄』に云く「願説は先ず行者の願力を指す。推功

文に前後あるも義に別なし。大慈悲は因果に通ず。今、施説門では出第五門は猶菩薩の因位にあり、爾れども大慈悲と云うに妨げなし。

上の四は皆、智、今はこれ大悲、五門は即ち是れ悲智なり。

觀察は方便備省で、之を出化の本となす。此れは、是れ能起。

「示応化身」等とは、是れ所起、

中に於いて応化身は能化の身で、

生死園、煩惱林は起化の処、亦所化の機、

生死は是れ果、煩惱は是れ因、

苦果は園に喩え、苦因は林に喩ふ。

園の園たる所以は、林あるを以つてなるに同じく、

生死の生死たるは煩惱あるに由る。

菩薩の生死を觀るや、生死即ち涅槃にして、

別に廻入すべき処なし。

今、其の廻入する所以は

衆生の煩惱稠林の如くなるを度せんが為である。

智に應ずる悲、見るべし。

「神通」とは総じて六通をさす。

一切の作用、壅るなきを「通」と云い、

所為靈妙にして凡夫の測る所に非ざるを「神」と云う。

「教化地」とは、「教化」は誨諭轉換に名け、

「地」は所赴の處に名づく。

「以本願力廻向故」とは、本願力に二種の義あり。

『六要抄』に云く

「願説は先ず行者の願力を指す。

歸本すれば唯是れ仏願力なり」と。即ち末に就いて言  
えば菩薩の本願なり。推功歸本すれば唯是れ仏願力で  
ある。吾が祖、二門偈御本典行巻引用の意は、弥陀の  
本願なり。本願とは二十二願である。

次に釈文、

「示応化身者如法華經普門示現之類也 遊戯有二義  
一者自在義菩薩度衆生譬如師子搏鹿所為不難如似遊戯  
二者度無所度義菩薩觀衆生畢竟無所 有雖度無量衆生  
而實無一衆生得滅度者示度衆生如似遊戯 言本願力者  
示大菩薩 於法身中常在三昧 而現種種身 種種神通  
種種說法 皆以本願力起 譬如阿修羅琴雖無鼓者而  
音曲自然是名教化地第五功德相」

「示応化身者如法華經普門示現之類也」

『法華經普門』に觀音三十三身を現わし、十九種の説  
法をなして随類示現應機化変の相を説く。今彼を指し  
て以つて示応化身を例するなり。還相廻向の願文に、  
位を標して究竟一処補処と云い、行相を示して本願自  
在所化と云い、分齊を顯して修習普賢之徳と云う。

推功歸本すれば唯是れ仏願力なり」と。  
即ち末に就いて言えば菩薩の本願なり。  
推功歸本すれば唯是れ仏願力である。

吾が祖、『二門偈』御本典行巻引用の意は、弥陀の本願なり。  
本願とは二十二願である。

次に釈文、

「示応化身を示して」とは、『法華經』の普門示現の類のごとし。  
「遊戯」に二の義あり。

一には自在の義なり。菩薩、衆生を度することは、たとへば獅子の  
鹿を搏つがごとく、なすところ難からざること遊戯するがごとし。

二には度無所度の義なり。菩薩、衆生を觀するに畢竟じて所有な  
し。無量の衆生を度すといへども、実は一衆生として滅度を得るもの  
なし。衆生を度するを示すこと遊戯するがごとし。

「本願力」というは、大菩薩、法身のなかにおいて、つねに三昧にま  
しまして、種々の身、種々の神通、種々の説法を現ずることを示す。  
みな本願力をもつて起せり。たとへば阿修羅の琴の鼓するものなしと  
いへども、音曲自然なるがごとし。これを教化地の第五の功德相と名  
づく。」

「示応化身を示して」とは、『法華經』の普門示現の類のごとし。」

『法華經普門』に觀音三十三身を現わし、  
十九種の説法をなして随類示現應機化変の相を説く。

今、彼を指して以つて示応化身を例するなり。  
還相廻向の願文に、

位を標して「究竟一処補処」と云い、  
行相を示して「本願自在所化」と云い、  
分齊を顯して、「修習普賢之徳」と云う。

經に云く

「彼菩薩乃至成仏不更惡趣 神通自在常識宿命 除生他方五濁惡世示現同彼如我國也」

機の所宜に應じて變化する所の身を応化身と云う。応即ち化で、十界身を現するなり。

「遊戯有二義」

初めは俗諦の事相に約し、後は真諦の理性に約す。真俗不二が真の遊戯なるが故に。

『智論』七に云く

「菩薩心生諸三昧 欣樂出入自在 名之為戲 非結愛戲也 戲名自在如獅子鹿中 自在無畏故名為戲」

又八に云く「譬如獅子搏鹿自在戲樂 仏亦如是」と。

『六要』に云く「獅子、猛獸鹿者小獸 搏之最易 以

譬菩薩濟度衆生 得其自在神力也」初義可知。

文に『智論』二十に云く「三世十方仏 求一切衆生

不可得故無所度」と。

劫を窮めて度すと雖も、終に一衆生をも濟度せず。之を度無所度と云う。觀とは般若が如に達するを云う。方便智は衆生の苦惱を觀ず。而して般若は衆生は

經に云く

「彼の菩薩、乃至成仏まで惡趣に更かえらず。神通自在にして常に宿命を識る。他方五濁惡世に生じて、示現して彼に同どうじ、我が國の如くならんをば除く。」

機の所宜に應じて變化する所の身を応化身と云う。応即ち化で、十界身を現するなり。

「遊戯有二義」

初めは俗諦の事相に約し、後は真諦の理性に約す。真俗不二が真の遊戯なるが故に。

『智論』七に云く

「菩薩心生諸三昧 欣樂出入自在 名之為戲 非結愛戲也 戲名自在如獅子鹿中 自在無畏故名為戲」

又、八に云く

「譬如獅子搏鹿自在戲樂 仏亦如是」と。

『六要』に云く

「獅子、猛獸鹿者小獸 搏之最易 以譬菩薩濟度衆生 得其自在神力也」初義可知。

文に『智論』二十に云く

「三世十方仏 求一切衆生 不可得故無所度」と。

劫を窮めて度すと雖も終に一衆生をも濟度せず。之を「度無所度」と云う。

觀とは般若が如に達するを云う。

方便智は衆生の苦惱を觀ず。

而して般若は「衆生は是れ無所有なり」と觀ず。

是れ無所有なりと観ず。権実不二、二智相縁ること。上の所明の如し。

「雖度無量衆生」

権智が機を省みて常に能く衆生を度するなり。

「実無一衆生得滅度者」真智が如に達して滅度を得るもの無きなり。幻人の幻刀を振ふて幻人を殺すが如し。生死即ち涅槃なれば何の出退する所あらむ。煩惱即ち菩提なれば、何の断破する所あらむ。衆生無所有なれば、何の化度する所あらん。真智は如是に観ずと雖も、方便能く衆生の煩惱を観じて身を現じて化を垂る。二智相縁つて化すること遊戯の如し。

『大経』に云く「等観三界 空無所有 志求仏法 具諸弁才 除滅衆生 煩惱之患」この謂である。前に園林遊戯地を釈して、菩薩自娛樂地と云う。「所云娛樂」とは、今此二智相即の位を謂うのである。

「言本願力者」法身とは若し広門に約せば平等法身なり。若し略門に約せば眞実智慧無為法身なり。大菩薩とは八地已上の菩薩。常在三昧とは広門に約せば報生三昧であり、略門に約せば大寂靜なり。

権実不二二智相縁ること。上の所明の如し

「雖度無量衆生」

権智が機を省みて常に能く衆生を度するなり。

「実無一衆生得滅度者」

真智が如に達して滅度を得るもの無きなり。幻人の幻刀を振ふて幻人を殺すが如し。生死即ち涅槃なれば何の出退する所あらむ。煩惱即ち菩提なれば、何の断破する所あらむ。衆生無所有なれば、何の化度する所あらん。真智は如是に観ずと雖も、方便能く衆生の煩惱を観じて身を現じて化を垂る。二智相縁つて化すること遊戯の如し。

『大経』に云く

「三界は空無所有なりと等観して、仏法を志求す。諸々の弁才を具し、衆生の煩惱の患を除滅す。」この謂である。前に園林遊戯地を釈して、菩薩自娛樂地と云う。「所云娛樂」とは、今此二智相即の位を謂うのである。

「言本願力者」

法身とは

若し広門に約せば平等法身なり。

若し略門に約せば眞実智慧無為法身なり。

大菩薩とは八地已上の菩薩。

常在三昧とは

広門に約せば報生三昧であり、

略門に約せば大寂靜なり。

「於法身中常在三昧」は是れ不動。「而現種種身」はこれ而動なり。「種種身」は身業、「種種神通」は意業、「種種說法」は口業、或可。「三昧」は意業にして不動、身口二業を以って而動を示し、而して神通は中間に在って身口二業に通ぜしむ。

### 「以本願力起」

皆是れ菩薩因位の願力の所感なるを云う。所謂除其本願である。而して菩薩因位の本願は唯是れ法徳で、仏の大悲願を全領して己が願となすものなれば、推功帰本すれば、弥陀の本願力である。よって証卷の引用は浄土の菩薩の徳を示さんが為、行卷の引用は他力本願を示さんが為の御引用である。此の義は下の覈本かく釈に本づく。

### 「譬如」等は喩頭、『智論』十七に曰く

「法身菩薩变化無量身 為衆生說法 而菩薩心無所分別 如阿修羅琴 常自出声 随意而作無人彈者 此亦無散心 亦無摂心 是福德報生故 随人意出声 法身菩薩亦如是 無所分別亦無散心 亦無說法相 是無量福德禪定智慧因縁故 是法身菩薩種々法音随応而

「法身中において常に三昧にましまして」はこれ不動。

「而種種の身を現して」はこれ動なり。

「種種身」は身業、「種種神通」は意業、「種種說法」は口業、或可。

「三昧」は意業にして不動、身口二業を以って動を示し、

而して神通は中間に在って身口二業に通ぜしむ。

「本願力を以って起こせり」

皆これ菩薩因位の願力の所感なるを云う。

いわゆる「除其本願」である。

而して菩薩因位の本願は唯これ法徳で、

仏の大悲願を全領して己が願となすものなれば、

推功帰本すれば、弥陀の本願力である。よって

証卷の引用は浄土の菩薩の徳を示さんが為、

行卷の引用は他力本願を示さんが為の御引用である。

この義は下の覈求かくとほん其本釈に本づく。

「譬如」等は喩頭

『智論』十七に曰く

「法身菩薩は無量身を变化して衆生の為に說法す。

而も菩薩の心は分別する所無し。

阿修羅の琴が常に自ら声を出し、意に随って作し、

人の弾ずる者無きが如し。

これも亦た散心無く、亦た摂心も無し。

これ福德の報生なるが故に人の意に随って声を出すなり。

法身の菩薩も亦た是の如し。

分別する所無く、亦た散心も無く、亦た説法の相も無し。

これ無量の福德・禪定・智慧の因縁の故に、

この法身の菩薩は種々の法音を応ずるに随いて出だすなり」

出

自在の化益で願力の然らしむるに由ることを喩顯するなり。教化地、身を現じ衆生を変ずるを総じて教化と名く、此事に依る位を教化地と名く。

### 一、二利成就

「菩薩入四種門自利行成就 応知

成就者謂自利満足也 応知者謂由自利故則能利他

非是不能自利而能利他也」

自利成就を結成す。中に於いて『論』文と『註』釈とあり。『註』釈の中に成就と応知との釈あり。応知の釈は二利雙運を顯す。『智論』四十九に云く

「行者先求自度 然後度人 若未能自度 而欲度人者 如不知浮人欲救於溺 相輿俱没」と。

自利成就する者のみ能く利他することを得。自利成就せずして何ぞ能く利他せん。故に自利満足する時、利他亦満足す。応にこの意を知るべしとなり。

自在の化益で願力の然らしむるに由ることを喩顯するなり。教化地、身を現じ衆生を変ずるを総じて教化と名く、此事に依る位を教化地と名く。

### 一、二利成就

菩薩は入の四種の門をもつて自利の行成就す、知るべし。

「成就」とは、いわく、自利満足なり。

「知るべし」というは、いわく、

自利によるがゆえにすなわちよく利他す。

これ自利することあたはずしてよく利他するにあらず、と知るべしとなり。

自利成就を結成す。

中に於いて『論』文と『註』釈とあり。

『註』釈の中に「成就」と「応知」との釈あり。

「応知」の釈は二利雙運を顯す。

『智論』四十九に云く

「行者は先づ自らを度することを求め、然る後に人を度す。

若し未だ自ら度すること能わずして人を度せんと欲する者は、

浮ぶことを知らざる人の溺るるを救わんと欲して

相いともに没するが如し」と。

自利成就する者のみ、能く利他することを得。

自利成就せずして何ぞ能く利他せん。

故に自利満足する時、利他亦満足す。

応にこの意を知るべしとなり。

「菩薩出第五門廻向利益他行成就 応知

成就者謂以廻向因証教化地果 若因果無有一事不能利他 応知者謂 応知 由利他故則能自利 非是不能利他而能自利也」

利他成就を結成す。中に於て『論』文と『註』釈とあり。『註』釈中に成就と応知の釈あり。

成就の釈は、上は果徳に就いて其の究竟を顕し、今は因果の相に約して成就相を示す。其義一なり。然るに二利の円満は仏果に非ずば得べからず。因分の二利は満足と云うべからず。故に二利円満は果徳を究む。然るに今此中は広門の徳相に約す。故に因徳成満の辺を取りて、二利行満足を顕す。其果徳に於ては存して論ぜず。論ぜずと雖も義は則ち豊富なり。

「応知の釈は二利雙運を顕す。『十地論』一に云く

「菩薩教化衆生 即自成仏法 是故利他亦名自利」

と前の火橋かてんの譬喩の如し。

已上、二利成就は以て二乗と三乗の菩薩に揀異かんす。

二乗は自利のみ、三乗は利他ありと雖も、自利究竟せず。二利究竟するを大乘の菩薩と名づく。

「菩薩は出の第五門の回向をもつて利益他の行成就す、知るべし。

「成就」とは、いわく、回向の因をもつて教化地の果を証す。もしは因、もしは果、一事として利他することあたはざることあることなし。「知るべし」というのは、いわく、利他によるがゆえにすなわちよく自利す。これ利他することあたはずしてよく自利するにはあらずと知るべしとなり。

利他成就を結成す。

中に於て『論』文と『註』釈とあり。

『註』釈中に成就と応知の釈あり。

成就の釈は、上は果徳に就いて其の究竟を顕し、今は因果の相に約して成就相を示す。

其義一なり。

然るに二利の円満は仏果に非ずば得べからず。

因分の二利は満足と云うべからず。

故に二利円満は果徳を究む。

然るに今此中は広門の徳相に約す。

故に因徳成満の辺を取りて、二利行満足を顕す。

その果徳に於ては存して論ぜず。

論ぜずと雖も義は則ち豊富なり。

「応知」の釈は二利雙運を顕す。

『十地論』一に云く

「菩薩教化衆生 即ちこれ自ら仏法を成ず。

この故に利他を亦た自利と名づく」と

前の火橋かてんの譬喩の如し。

已上、二利成就は以て二乗と三乗の菩薩に揀異かんす。

二乗は自利のみ、三乗は利他ありと雖も自利究竟せず。二利究竟するを「大乘の菩薩」と名づく。

『論註筆記卷下』に曰く

「起観生信に五門を説けども、其の仏道の正因たるは第五の回向門である。即ち願事成就は回向門の回向を以て清浄土の因と□る。利行満足章に五門を説くといえども、其の事業成弁の果位は第五の教化地の果である。今此文、回向門を以て因とし、教化地を以て果とし、正因得果を楷定する。信巻には信樂を判じて、「斯別如来大悲心故成報土正定因」及び仏の四等を運んで行者に在ら令めて、「大慈悲は是れ仏道正因なり」と判ず。尤も仏の四等にありては、諸法平等を所等とす。行者の四等にありては願海平等とする。此れ異ありと雖も、四等し展転して一の大悲心に歸し、大慈悲等しきを以て仏道の正因とすること、これ同じ。即ち信巻の大信は是れ回向の因なり。

扱さて、証巻は還相利他の行、合して挙げて眞実証□□の<sup>大用</sup>とし、『略文類』の大証段には、「即是利他教化地之果也」と判ず。是の証巻の大証は教化地の果なり。即ち施設門にありては因を回向門と名づけ、果を教化地と名づく。実義門にありては、因を大信とし、

『論註筆記卷下』に曰く

「起観生信に五門を説けども、その仏道の正因たるは第五の回向門である。即ち願事成就は回向門の回向を以て清浄土の因と□る。利行満足章に五門を説くといえども、その事業成弁の果位は第五の教化地の果である。今、此文、回向門を以て因とし、教化地を以て果とし、正因得果を楷定する。

信巻には信樂を判じて、

「斯別如来大悲心故成報土正定因」及び

仏の四等を運んで行者に在ら令めて、

「大慈悲は是れ仏道正因なり」と判ず。

もつとも仏の四等にありては、諸法平等を所等とす。

行者の四等にありては願海平等とする。

これ異ありと雖も、四等し展転して一の大悲心に歸し、

大慈悲等しきを以て仏道の正因とすること、これ同じ。

即ち信巻の大信は是れ回向の因なり。

扱さて、証巻は還相利他の行、合して挙げて眞実証□□の<sup>大用</sup>とし、

『略文類』の大証段には、

即ち是れ利他教化地之果なり、と判ず。

是の証巻の大証は教化地の果なり。

即ち施設門にありては

因を回向門と名づけ、果を教化地と名づく。

実義門にありては、

因を大信とし、果を大証とす。

果を大証とす。其の名を立すること異なれども、其の体は一なり。大信大証の因果を相成す。今此の一文を以って其の基本とす。

此を以って見れば起観生信の五門、前四門は仏道の正因に非ず。利行満足章の五門、前四門は業事成弁究竟の果位に非ず。因って利行成の第五門のみに正因得果を判定してある。自利成の前四門にありては、因果を判ぜず。

古来、五因五果と判ずる。是れ虚妄の義なり。若因若果等。其の因は是れ回向門なり。大悲善巧を以って他の衆生を利する。其の果は是れ教化地の果である。

「若因若果、無有一事不能利他」

時に此の文を以ってすれば、正因はただ利他の回向門に局る。妙果はただ利他の教化地に局る。之を離して因あることなし。之を離れて果あることなし。

五因五果の論、必ず非なり。殊に近大二門の位の如き、正して因の位なり。実義にありては、已に其の正定の因益なり。施設門では、初至浄土入大会衆の位にして、未だ正修行の自位に至らず、果の名は決して与

其の名を立すること異なれども、其の体は一なり。大信大証の因果を相成す。

今此の一文を以って其の基本とす。

此を以って見れば起観生信の五門、前四門は仏道の正因に非ず。

利行満足章の五門、前四門は業事成弁究竟の果位に非ず。

因って利行成の第五門のみに正因得果を判定してある。

自利成の前四門にありては、因果を判ぜず。

古来、五因五果と判ずる。是れ虚妄の義なり。

「若因若果」等。

其の因は是れ回向門なり。

大悲善巧を以って他の衆生を利する。

其の果は是れ教化地の果である。

「若因若果、一事として利他するに能はざることなし」

時に此の文を以ってすれば、

正因はただ利他の回向門に局る。

妙果はただ利他の教化地に局る。

之を離して因あることなし。

之を離れて果あることなし。

五因五果の論、必ず非なり。

殊に近大二門の位の如き、正して因の位なり。

実義にありては、已に其の正定の因益なり。

施設門では、初至浄土入大会衆の位にして、

未だ正修行の自位に至らず。

果の名は決して与えられぬ。

えられぬ。